慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	翻訳 アラビア語版『アリストテレスの神学』序文・ 問題一覧
Sub Title	The Arabic Version of "Theology of Aristotle", Preface and Headings
Author	岩見, 隆(Iwami, Takashi) 大川, 京(Okawa, Kyo) 木下, 雄介(Kinoshita, Yusuke) 高田, 康一(Takada, Koichi) 野元, 晋(Nomoto, Shin) 堀江, 聡(Horie, Satoshi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2002
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 No.17 (2002. 5) ,p.189- 211
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20020531-0189

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

翻訳

アラビア語版『アリストテレスの神学』序文・問題一覧

岩見　隆・大川　京・木下　雄介
高田康一・野元　晋・堀江　聡　訳

はじめに

『アリストテレスの神学』(Uthūlūjiyā Aristāṭālīs) をアラビア語原文から訳出する。この翻訳は1996年度に始まった慶應義塾大学言語文化研究所・共同研究 (B) 方式「イスラーム古典期哲学文献の研究」の成果であり,[1] 今回発表分で全篇を訳出したことになる。

以下のアラビア語テクストを使用し，底本にはPA[1]を採用した。

DA : Friedrich DIETERICI (ed.), *Die sogenannte Theologie des Aristoteles, aus arabischen Handschriften zum ersten Mal herausgege-*

---

(1) 既発表分は以下の通り。

第一章『慶應義塾大学日吉紀要　人文科学』第13号 (1998, pp.123-141.)

第二章『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第30号 (1998, pp.219-240.)

第三章『慶應義塾大学日吉紀要　人文科学』第14号 (1999, pp.55-69.)

第四章～第六章『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第31号 (1999, pp.115-154.)

第七章『慶應義塾大学日吉紀要　人文科学』第15号 (2000, pp.92-106.)

第八章・第九章『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第32号 (2001, pp.121-186.)

第十章『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第33号 (2001, pp.161-205.)

なお，第二章の掲載誌には，堀江聡「アラビア語版『アリストテレスの神学』研究展望」(pp.201-217) も発表されている。あわせて参照されたい。

ben, Leipzig, 1882.

PA : ʿAbdurrahmān BADAWĪ (ed.), *Aflūtīn ʿinda al-ʿArab : Plotinus apud Arabes,* Cairo, 1955 [PA[1]] ; 2 nd ed., 1966 [PA[2]].

A : Sayyed Jalaloddin ASHTIANI (ed.), *Anthologie des philosophes iraniens depuis le xvII^e siècle jusqu'à nos jours,* t. III, Téhéran / Paris, 1976.(第一章～第四章のみ)

R : Franz ROSENTHAL (ed. and tr.), "Aš-Šayḫ al-Yûnânî and the Arabic Plotinus Source", *Orientalia,* no. 21, 1952, pp. 461–492 [R[1]] ; no. 22, 1953, pp. 370–400 [R[2]] ; no. 24, 1955, pp. 42–66 [R[3]].

以下のヨーロッパ語訳を参照した。

DG : Friedrich DIETERICI (tr.), *Die sogenannte Theologie des Aristoteles, aus dem Arabischen übersetzt und mit Anmerkungen versehen,* Leipzig, 1883.

GL : Geoffrey L. Lewis, *A Re-examination of the so-called "Theology of Aristotle",* St. John Baptist College, 1949 [GL[1]] ; Paul HENRY et Hans-Rudolf SCHEYZER (ed.), *Plotini Opera,* t. II : *Enneades* IV – V, *Plotiniana arabica ad codicum fidem anglice vertit Geoffrey Lewis,* Paris / Bruxelles, 1959 [GL[2]].

LR : Luciano RUBIO (tr.), *Pseudo-Aristóteles, Teología,* Madrid, 1978.

異読は GL[1] および PA の校註にもとづいて参照したが，出典の指示にさいしては，PA の略号を一部変更して整理した。

本訳稿	GL[1]	PA
C : Constantinople, Aya Sofya 2457.	C	ṣād
B : Berlin, Bibliothek zu Berlin 5121 (Sprenger 741).	B	lām
P : Paris, Bibliothèque Nationale 2347.	P	bāʾ
I : London, India Office 3832.	I	ϕ
M : London, British Museum Or. 1512.	M	ϕ
O : Oxford, Bodleian Library 95.	O	ϕ

H : Constantinople, Ḥamīdīyah 717.	ϕ	ḥā'
E : Cairo, Dār al-Kutub, Ṭal'at 680 majāmī'.	ϕ	'ayn
S : Cairo, Dār al-Kutub, Ṭal'at 384 falsafah.	ϕ	sīn
T : Cairo, Dār al-Kutub, Taymūr 102 ḥikmah.	ϕ	mīn
Q : Cairo, Dār al-Kutub, 617.	ϕ	qāf
F : Paris, Bibliothèque Nationale 1640.	ϕ	fā'

なおDAの本文は，B, Pに加えて，タブリーズ所在の写本の筆写を参照しながら作成されたようであるが，異読にかんする註記はない。

段落分けは，原則としてPAおよびDAのものを踏襲し，ブラケット内にPA[1]の頁数と行位置を示した。また『エンネアデス』との対応関係を本稿末尾の対照表にまとめたが，これはルイス訳に依拠している。

なお『エンネアデス』との比較検討にさいしては主としてGL[2]のギリシア語本文に依拠し，邦訳『プロティノス全集』（田中美知太郎・水地宗明・田之頭安彦訳，全五巻，中央公論社，1986-1988）を参照した。

慈悲深く慈愛あまねき神の御名において

諸世界の主たる神に称讃を，ムハンマドとその一族に祝福を

[1]ギリシア語でテオロギア
すなわち神性にかんする議論
と呼ばれる哲学者アリストテレスの書物
テュロスの人，ポルピュリオスによる註釈

第一章[(2)]

エメサの人，アブド・アル・マシーフ・イブン・アブドゥッラー・イブン・ナーイマが
これをアラビア語に訳し
アフマド・イブン・アル・ムアタシム・ビッラーのために
アブー・ユースフ・ヤアクーブ・イブン・イスハーク・アル・キンディーが
（神よ彼に慈悲を垂れたまえ）
修正を行なった

[3：10][2]その最終目的の欠くべからざる必要性ゆえに，またそれを希求する道を辿りつづけることによって到来する利益の大きさゆえに，己れがめざす最終目的の認識に奮闘努力するすべての者にとって相応しいことであるが，己れが求めるものへと導かれてゆくときは，もろもろの魂から疑念を取り除く確信そのものに通じる諸行程を平坦にととのえるべきであり，[4] 自分を高貴さの極限に引き上げてくれる諸学の修業においては，向上の歓びを妨げるものに何ら束縛されないふるまいを，すなおにたゆみなく続けるべきであって，この高貴さの極限をこそめざして，知性的な魂たちは本性的な欲求によって昇ってゆくのである。

---

(2) 「第一章（al-mīmar al-awwal）」――このように題されているが，実際には作者不詳の序文であって，ギリシア語原文は存在しない。

［4：03］[3] かの賢者は言った。最初の欲求は最後の達成であり，最初の達成は最後の欲求である。我々が辿り着いた，この書物が包含する分野の最初の部分は，すでに扱われたもろもろの主題を通して我々が終始一貫もとめつづけたものにおける我々の究極の目的であり，最終目的なのである。[4] あらゆる吟味と探求の最終目的が真理の獲得にほかならず，あらゆる行為の最終目的が仕事の遂行である以上，吟味と検討の徹底が確実に認識させてくれるように，存在する(3) 行為者はすべて永遠の本性的欲求ゆえに行為するが，その欲求と探求は第二の原因によるものであり，哲学において探求される最終目的の意味を確実に捉えるのでなければ，吟味と検討は失敗したことになり，認識も失敗し，善意と行為も失敗したことになる。

［4：10］[5] 傑出した哲学者たちが一致して認めることから確かであるように，世界の原初的な(4) 無始の原因は四つあり，これは質料，形相，作用因，そして完成である。したがって，これらの原因と，それらに発し，それらのなかに偶成するもろもろの偶有性を検討し，それら偶有性の諸原理，諸原因，そしてそのなかにあるもろもろの能動的ロゴスを知り，そのなかのどの原因が，優先と支配にもっとも相応しいかを知るのでなければならない，たとえ同等性の何らかのに意味において，それらのあいだに同等性が成立するとしても［5］。[6] というのも，我々は，すでに先行する部分において，『自然学以後』という我々の書物において，これらのものの説明とその原因の解明とをすませ，魂，自然，および両者の活動の分析につづけて，これら四原因の序列を神的知性的な序列にそって示してある。[7] 我々はまた，かしこにおいて，必要十分な規準によって，探求の対象である究極目的の意味を確立し，中間をもつものが終端をもたざるをえ

---

(3)「存在する（kā'inīna）」――異読 I, M による（GL[1], p. 2）。PA および DA には「完璧な（kāmilīna）」とある。

(4)「原初的な（al-bādi'ah）」――ルイスの読みにしたがう（GL[1], p. 2）。PA および DA には「明白な（al-bādiyah）」とある。

ず，希求されるものが究極であり，(5) 究極の意味が，それによってそれ以外のものが生じ，それ以外のものによってそれが生じないものであることを解明した。8 というのも，認識の存在を確立することは究極の存在を証明することになり，というのも認識とは究極に立ち至ることなのである。なぜなら，終りをもたないものを，究極と終りをもつものによって切り分けることはできない。9 諸学の諸原理にかんする章は，(6) 探求対象の認識をめざしたいと願う者にとって，有益な序文であり，諸学の訓練による習得と熟達は，諸自然学に赴こうと願う者にとって必要欠くべからざるものである，希求されるものの獲得と探求対象の探査にそれが役立つがゆえに。

［5：10］10 すでに，前置きにするのがならわしとなっているいくつかの序説，すなわち我々が本書において解明したいと思うものの解明へといざなう諸原理は述べてあるので，これについてくどくどと述べ立てるのはやめにしよう，それは『メタ・タ・フュシカ』の書においてすでに解明したのであるから。11 我々がそこで行なったことだけに話をかぎることにして，さて，本書で我々が解明したいと思っているものにおける我々の目的を述べることにする。その目的は普遍的な学であり，［6］それは我々の哲学の総体を述べつくすためのものであって，我々の諸問題が包含するものの全体を，我々は普遍的な学の方へと方向づけているが，それは，この学の諸目的を述べることによって，この学を希求するようにと読者をいざない，この学の先行部分の理解を助けるためである。12 そこで我々はまず，そういうもののうち，本書によって我々がめざす目的をまとめて述べるこ

---

(5) 「希求されるものが究極であり（al-bughyah *al*-ghāyah）」――ルイスの読みにしたがう（GL[1], p. 3）。PA および DA には「希求が究極に対するものであり（al-bughyah *li-l*-ghāyah）」

(6) 「諸学の諸原理にかんする章は（al-*mīmar* fī awāil al-ʻulūm）」――PA および DA による。ルイスは異読 C の「諸学の諸原理の考究（al-*tabaḥḥur* fī awāʼil al-ʻulūm）」

とにし，我々が解明したいと思うものを，最初に，要約的かつ簡潔にではあるが，本書に包含されるものの大略を覆い，集約するように描き，[13] 次に，我々が解釈し，略述し，要約したいと思う諸問題の題目を示す。それから，それらの問題の各々にかんする議論を，まっとうかつ徹底的なことばで説明する――それがいと高き神の御心にかなうなら。

［6：07］[14] 本書における我々の目的は，神性にかんする基本的な議論と神性の解明にあり，それが第一原因であること，永遠も時も神性の下にあること，神性が原因の原因であるとともに，ある意味において，(7) 諸原因の創出者であること，光輝く力が神性から知性にそそぎ，(8) 知性を介して神性から天圏の全体的魂にそそぎ，魂を介して知性から自然に，そして自然を介して魂から生成衰滅する諸事物にそそぐこと，[15] この活動が運動なしに知性から生じること，一切の事物の運動が知性に発し，知性ゆえに起こること，諸事物が一種の願望と希求にかられて知性の方へ運動することの解明にある。

［6：13］[16] しかるのちに，我々は知性的世界に言及して，その光輝，その気高さ，その美しさを描き，そのなかにある高雅で，卓越した，輝かしい，もろもろの神的形相を語り，諸事物の華やかさ，美しさが知性的世界に由来し，［7］感覚的事物がどれもみなこの諸形相を摸倣してはいるものの，その外皮の多さゆえに，諸形相を真に伝えることができないこと(9)

---

(7)「ある意味において（bi-naw‘ min-al-anwā’）」――異読Qによる。ルイスもこのように訳しているが（GL[1], p. 4），PA および DA には「一種の創造によって（bi-naw‘ min-al-ibdā‘）」とある。

(8)「そそぎ（tasīḥu）」――PA および DA の「現われ（tasnaḥu）」を訂正する。第十章§137 の訳註を参照。

(9)「感覚的事物が……できない（lā taqdiru ‘alā ḥikāyat al-ḥaqq min waṣf-hā）」――PA による。DA には三人称男性単数の活用形で lā yaqdiru とあり，これをルイスは一人称複数に訂正し，「我々はそれを描くことで真実を伝えることができない（lā naqdiru ‘alā ḥikāyat al-ḥaqq fī waṣf-hā）としている（GL[1], p. 5）。

を述べてから，[17] 天圏の全体的魂を語るとともに，力がどのように知性から全体的魂にそそぎ，またそれがどのように全体的魂を知性に似させるかを我々は描くことにする。

［7：04］[18] 我々は，星辰の美しさとその華やかさ，星辰のなかにあるあの諸形相の輝きを語り，[19] それから，月圏の下で動きまわる自然を語り，またいったいどのように，天圏の力が自然にそそぎ，(10) 自然がそれを受けいれそれを摸倣し，その刻印を可滅的かつ質料的な感覚的諸事物のなかに顕わすかを語ることにする。

［7：07］[20] それから我々は，これらの理性的魂が，己れの本来の世界から物質的なものの世界に墜ちてくるさいに，それらが上昇するさいに，いかなる状態にあるかを，また上昇の原因が一つであることを語り，[21] もろもろの知性的な徳を固守してもろもろの肉体的な欲望に溺れることのない，高貴かつ神的な魂を語り，[22] また我々は，動物的魂と植物的魂，そして大地や火やその他のものの魂を語ることにする。さてこれから，諸問題の題目を述べるとしよう。

---

(10) 「そそぎ（tasīḥu）」――PA および DA の「現われ（tasnaḥu）」を訂正する。§14 の訳註を参照。

[8]　**慈悲深く慈愛あまねき神の御名において**

かの賢者がテオロギアの書における
解明を約した諸問題の題目(11)
この書は神性にかんする議論であり
テュロスの人，ポルピュリオスが註釈を行ない
エメサの人，アブド・アル・マシーフ・アル・ナーイミーが翻訳した

(一) 1 魂は，知性的世界にあるとき，いかなるものを想起するか。
(二) 2 あらゆる知解対象が時と無関係にあるのは，あらゆる知解対象および知性が，時の領域にではなく永遠の領域にあるからにほかならない，だからこそ知性は想起を必要としないようになっているのである。
(三) 3 高次の世界にある知性的諸事物は，時のもとにはなく，一つまた一つと生成されたわけでもなく，分割を受けいれもしない，それゆえ想起を必要としないのである。
(四) 4 魂――魂はいかにして知性のなかにある諸事物を見るのか。
(五) 5 可能態で存在する単一のものは，他のもののなかでは多である，というのも，他のものはそのすべてを一挙に受けいれることができないから。
(六) 6 知性――知性は高次の世界にあるとき己れ自身を認識するのか。
[9] (七) 7 認識――知性はいかにして己れ自身を想起するのか。はたし

(11) 「諸問題の題目 (ru'ūs al-masā'il)」――以下の部分は数行おきに『エンネアデス』第Ⅳ論集第四論文「魂の本質について」第一章～第三四章に対応し，その小見出しあるいは要約のごときものになっている。行頭の漢数字はPAのアラビア語アルファベットによる番号付けにならったものであり，バダウィーは異読Qを出典としてあげている。

て知性は，諸事物を認識することなしに，己れ自身だけを認識するのか，それとも己れ自身とすべての諸事物をともに認識し，それはまた，己れ自身を認識すればすべての諸事物を認識することになるからであるのか。

(八) [8] 魂――魂はいかにして己れ自身を知解し，いかにして他の諸事物を知解するのか。

(九) [9] 魂――魂は，それが高次の知性的な世界にあるとき，知性と一体になっている。

(一〇) [10] 想起――想起の始まりはどこからなのか，また想起はそれがある場所に諸事物を連れてゆくのである。

(一一) [11] 想起，認識，表象作用。

(一二) [12] 諸事物はすべて表象力のなかにあるが，第一次的なあり方ではなく第二次的なあり方であるのである。

(一三) [13] 魂――魂は知性的な世界にあるとき，もっぱら知性によって純粋善だけを見る。

(一四) [14] 卓越した高貴な諸実体にとって，想起は無縁である。

(一五) [15] 想起――想起は何であるか，どのようにあるか。

(一六) [16] 知性――かしこにおいて認識は無知に劣るものであり，無知はかしこの知性にとっては誇りである。

(一七) [17] 魂――高次の世界における魂による万物の想起は，可能態においてあるにすぎない。

(一八) [18] 我々がかしこにいるとき知性的な諸事物を眺めるのに用いるもの，我々がここにいるときは，それが我々の吟味の対象なのであるが。

(一九) [19] 想起――想起は天からしか始まらない。

(二〇) [20] 魂の諸徳――魂の想起は天にある。

(二一) [21] 星辰――星辰は何らかの諸事物を想起するのか。

[10] (二二) [22] 神的かつ高貴な魂。

(二三) [23] 星辰には理性も思考もない，というのも星辰は何も求めていないからである。

（二四）[24] 星辰――星辰は感覚的な諸事物も知性的な諸事物も想起しない。星辰には，現前する諸知識だけがそなわっている。

（二五）[25] 視覚をそなえたすべてのものが想起をもそなえているわけではない。

（二六）[26] 木星〔ゼウス〕の魂[12] ――木星の魂は想起しない。

（二七）[27] 日月――この両者はそれぞれ異なる種類であって，一方は創造主――威あるかな，力なるかな――のごとくであり，もう一方は全体的魂のごとくである。

（二八）[28] 創造主――威あるかな，力なるかな――創造主は想起を必要としない，というのも想起は創造主ではないからである。

（二九）[29] 世界全体の魂――この魂は想起することも思考することもない。

（三〇）[30] 思考するもろもろの魂。

（三一）[31] 知性本性――知性本性が想起することはない。想起は自然本性に属している。

（三二）[32] 思考――思考は何であるか。

（三三）[33] この世界が現前するものと来たるべきものをいっしょにすることはない。

（三四）[34] 統御――全体者は統御しない。[13]

（三五）[35] 想起，思考，およびこの両者に類似したものは偶有性である。

（三六）[36] 自然と全体者の統制〔叡智〕との区別。

（三七）[37] 自然は，全体者の統制〔叡智〕の似姿であり，魂にとっての下限

---

(12) 「木星〔ゼウス〕の魂」――異読Cにより「魂（nafs）」を補い，これに続く代名詞もPAおよびDAの男性形（wa-anna-hu）を諸写本の女性形（wa-anna-hā）に訂正する（GL[1], p. 9）。

(13) 「全体者は統御しない（al-kull ghayr mudabbir）」――異読C, I, M, Pによる。PAとDAには「全体的なもの（al-kullī）とある（GL[1], p. 10）。また「統御しない」は「統御されない（ghayr mudabbar）」とも読める。

である。

[11]（**三八**）[38] 表象力――表象力は本性と知性のあいだにある。

（**三九**）[39] 表象力――表象力は偶成する徳であり，表象するものが，それに刻印される刻印を知ることができるようにする。(14)

（**四〇**）[40] 知性――知性は己れ自身の活動であり，己れ自身からなる生成である。

（**四〇***）[41] 知性――魂にそなわるものは知性にもそなわっている，というのも知性こそが魂にその力を授けるのであるから。また魂が表象し，質料のなかに入らせるものは，自然本性である。

（**四一**）[42] 自然本性――自然本性は作用を与えるとともに作用をこうむり，質料は作用をこうむるが作用を与えはしない，魂は作用を与えるが作用をこうむることはなく，一方，知性は物体には作用を与えない。

（**四二**）[43] 諸元素と諸物体の認識，本性はいかにしてそれらを統御しているか。

（**四三**）[44] 永遠――永遠は知性の活動であり，時は魂の活動である。(15)

（**四四**）[45] 全体者の魂――全体者の魂は，想起したことがない以上は，永

---

(14)「表象力――表象力は偶成する徳であり，表象するものが，それに刻印される刻印を知ることができるようにする（fī al-wahm wa-anna-hu faḍīlah ʻāriḍah yuʻṭī al-shayʾ al-mutawahhim an yaʻlama al-athar alladhī uththira fī-hi）」――ルイスの読みにしたがう（GL[1], p. 10）。異読Cは「それに刻印される刻印を見ないこと（lā yarā）ができるようにする」とも読め，どうやらPA[2]はそれにしたがったようである。なお，DAとPA[1]は「表象されるものが（al-mutawahham），それに刻印される刻印を吊り下げること（an yuʻalliqa; anna taʾalluq）ができるようにする」とある。

(15)「永遠――永遠は知性の活動であり，時は魂の活動である（fī al-dahr wa-anna-hu fiʻl al-ʻaql wa-l-zamān fiʻl al-nafs）」――ルイスの英訳による（GL[2], p. 92）。PAとDAには「精神（al-dhihn）――精神は知性の活動であり，その証拠（al-bulhān）は魂の活動である」とあり，ルイスも最初はそのように訳していた（GL[1], p. 11）。

遠の領域にはない。

(四五) [46] いかにして我々の魂は時の領域に入ったのか，魂は時の領域にあるのではなく，時の作り手になったのであるが。

(四六) [47] 時を産みだすもの，それは何であるか。

(四七) [48] 全体的な魂――全体的な魂は時のもとにあるのではない，ただその諸刻印だけが，時のもとに生じるのである。

(四八) [49] 全体的な魂――それが事物を一つまた一つと作ったのであるなら，必然的に全体的な魂は時のもとにあることになる。それとも全体的な魂は時のもとにはなく，それに与かる諸事物が時のもとにあるのであろうか。

[12] **(四九)** [50] 能動的なロゴスは諸事物を一挙につくるが，受動的なロゴスは，受動的な諸作用を一挙にではなく，一つずつこうむる。

(五〇) [51] 能動的ロゴス――能動的ロゴスは受動的ではない，また第一のものとは何であるか。

(五一) [52] 第一のものの位階は能動者であり，もっぱら作用を与えるばかりである。(16)

(五二) [53] 魂――魂は何らかの活動であり知性ではない。(17) 物事を一つずつ行なうものは，感覚的諸事物のなかにあるにすぎない。

(五三) [54] 質料は形相ではなく，この両者から合成された事物は，[55] ただ

---

(16) 「もっぱら……(wa-anna-hu innamā...)」――PA および DA による。ルイスは異読 C により「というのも，もっぱら……(li-anna-hu innamā...)」としている。

(17) 「魂は何らかの活動であり知性ではない(wa-anna-hā fi'l mā lā 'aql)」――異読 C による(GL[1], p. 12)。PA と DA，および異読 B, I, M, P には「魂は知解したものの活動である(wa-anna-hā fi'l mā 'aqala)」とある。

(18) 「この両者から合成された事物は，ただに単純な形相なのではない(wa-anna al-shay' al-murakkab min-humā laysa bi-mabsūṭ al-ṣūrah faqaṭ)」――PA および DA による。ルイスは異読 C を採用し，「この両者から合成された事物は単純ではない(wa-anna al-shay' al-murakkab min-humā laysa bi-mabsūṭ)」

に単純な形相なのではない。(18)

(**五四**) 56 魂――魂は円であるが，その中心から円周に到る距離のない円なのである。

(**五五**) 57 第一の純粋な善が中心であり，知性が運動を行なわない円であるなら，魂は運動する円である。

(**五六**) 58 魂――魂は何かを欲して運動し，また魂は諸事物を産みだす。

(**五七**) 59 この全体の運動は円周運動である。

(**五八**) 60 思考――いったいどうして思考は我々のなかで時とともにあったりするのか，また思考は多くの支配者である。

(**五九**) 61 欲望的な力――それはいかにして気概を刺戟するか。

(**六〇**) 62 往々にして人は，肉体のもろもろの必要ゆえに，そしてもろもろの善に対する無知ゆえに，多くの不合理なことばを口にせざるをえない。

(**六一**) 63 困惑は一般的なものからしか生じない。(19) 困惑を解き放つことは優れたものにしか生じない。

[**13**] (**六二**) 64 不道徳で放縦な人――いかなる諸力によって彼はそれと知られるか，有徳の人とは何であるか，義人でも不道徳でもない中間的な人は何であるか。

(**六三**) 65 肉体――肉体にはおのずから生命がそなわっているのか，それとも肉体のなかにある生命は，自然に由来するものでしかないのか。

(**六四**) 66 呼吸する肉体――それはどのように苦しみ，作用をこうむっているのか。我々は，みずから作用をこうむることなしに，いかにしてそれを知るのか。

と「単純な事物は純然たる形相である (fī anna al-mabsūṭ huwa al-ṣūrah faqaṭ)」を別々の題目として扱っている (GL[1], p. 12)。

(19) 「困惑は一般的なものからしか生じない (fī anna al-mu'ānāh innamā yakūnu min al-shay' al-'āmm)」――諸写本による (GL[1], p. 13)。PA と DA には「一般的なもののなかにしか (fī al-shay' al-'āmm)」とある。

(**六五**) [67] 我々の諸部分――それは何であるか，我々のなかにあるが我々のものではない諸部分は何であるか。

(**六六**) [68] 苦痛を複合的な生きものがもつのは，もっぱら繋合のせいであり，他のものと繋合したことのないものは，己れ自身でことたりているのである。

(**六七**) [69] もろもろの苦痛の認識――それはいかにして生じるか，またそれは，もっぱら魂と肉体の結合から生起するのである。

(**六八**) [70] 苦痛と快楽――両者はそれぞれ何であるか，両者の実体は何であるか。

(**六九**) [71] 苦痛――生きものはいかにして苦痛を感じとるのか，魂は苦痛にさらされてはいないのに。

(**七〇**) [72] 痛み――痛みが魂に降りかからないのであれば，痛みは何であるのか。痛みが魂とともにないのであれば，我々はどのようにして痛みをそこに見いだすのか。

(**七一**) [73] 諸感覚――諸感覚は刻印される諸刻印を受けいれない。

(**七二**) [74] 肉体的欲望――肉体的欲望は，もっぱら魂と肉体の結合から生じるのであり，魂だけにそなわるものでも，肉体だけにそなわるものでもない。

(**七三**) [75] 自然〔本性〕――自然は，もろもろの刻印と苦痛がそのなかに生じる何らかのものを，肉体のなかに生じさせる。

(**七四**) [76] 諸欲望――我々のなかには，肉体的欲望と自然〔本性〕的欲望があるのであろうか。

(**七五**) [77] 自然〔本性〕――自然は肉体ではない。

(**七六**) [78] 欲望――欲望の端緒は，何らかのやり方で合成された肉体である。

[14] (**七七**) [79] 欲望――肉体は，欲望がそれに先行するところのものである。

(**七八**) [80] 欲求――欲求は動物的肉体の領域に属し，欲望は自然〔本性〕の

領域に，獲得は魂の領域に属する。

（**七九**）[81] 魂――欲望は自然〔本性〕において生得的である。

（**八〇**）[82] 植物のなかにある欲望，それは動物のなかにある欲望とは別物なのではあるが。

（**八一**）[83] 大地のなかに欲望はあるか。もしあるならば，それは何であるか。

（**八二**）[84] 大地――大地は魂をもっているのか。魂をもっているなら，否応もなく，大地は生物でもあることにならざるをえないが。

（**八三**）[85] 諸感覚――生きものが，器官なしで感覚することが，可能であろうか。また諸感覚は何らかの必要ゆえにあるのであろうか。

［（**八三＊**）[86] 感覚――感覚は何であるか，どのようにあるか。[20]］

（**八四**）[87] 能動者――能動者は受動者には似ておらず，能動者の諸本性が，受動者の諸本性に変化することはない。

（**八五**）[88] 視覚に捉えられる諸事物――それらを魂はいかにして視るのか。

（**八六**）[89] 感覚――感覚は，魂と質料[21] の結合だけからは生じない，刻印を受けいれる別の[22] ものが必要なのである。刻印は何であるか，感覚はどのようにあるのか。

（**八七**）[90] 肉体的諸感覚――肉体的諸感覚は肉体的諸器官によって成立する。

（**八八**）[91] 識別――識別するもの，識別を受けるもの，そしてこの両者の

---

(20) 「感覚――感覚は何であるか，どのようにあるか（fī al-ḥiss wa-mā huwa wa-kayfa huwa）」――諸写本により補う（GL[1], p. 15）。この項目はPAとDAにはない。

(21) 「質料（hayūlā）」――異読Cによる（GL[1], p. 15）。PAやDA，他の諸写本には「空気（hawā'）」とある。

(22) 「別の（ākhar」――PAおよびDAによる。異読Cには「第三の（thālith）」とある（GL[1], p. 15）。

中間にあるものは何であるか。

（**八九**）[92] 感覚――感覚は魂の召使のようなものである。感覚は肉体の仲介なしには成立しない。

［**15**］（**九〇**）[93] 天――天と星辰に感覚はあるのか，ないのか。

（**九一**）[94] 全体者――全体者に感覚はない，ただその部分部分によって感覚するにすぎない。

（**九二**）[95] プラトン――プラトンはティマイオスと呼ばれる[(23)] 彼の書物で何を述べたか。

（**九三**）[96] 人間は可感的なものを知るにさいに諸感覚だけでは十分ではない，魂がそれで満足するのでないかぎり。

（**九四**）[97] 呪術と魔法，それらはどのようにして生じるのか，またどうして月は感覚するのか，全体者もそのいかなる部分も[(24)] 感覚しないのに。

（**九五**）[98] 大地――大地は太陽と月が感覚するように感覚するのか，大地はいかなるものを感覚するのか。

（**九六**）[99] 植物――植物は大気の領域に属する。

（**九七**）[100] 生殖力――生殖力は大地のなかにあり，植物に生長の手立てを与える，また生殖力にとって植物はたんに身体の位置を占めるにすぎない。

（**九八**）[101] 大地の身体――その身体に魂を与えるものは何なのか，というのも，部分々々が繋がりあったときの大地は，ばらばらであるときの大地と同じではない。

（**九九**）[102] 大地――大地には生長力と感覚力と知性があり，この知性は古人たちが豊饒神（デメテル）と呼んだものである。

（**一〇〇**）[103] 気概――はたして気概の力は肉体全体に拡がっているのか，

---

(23) 「……と呼ばれる（yud'ā）」――異読Cによる（GL[1], p. 16）。PAやDA，他の諸写本には「……まで（ilā）とある。

(24) 「そのいかなる部分も（shay' min ajzā'i-hi）」――DAにしたがう。PAには「そのいかなる部分においても（fī shay' min ajzā'i-hi）」とある。

それともその一部分にあるのか。

(一〇一) 104 欲望は肝臓のなかにある――欲望はかしこではどのようにあるのか。

(一〇二) 105 気概――肉体のなかでの気概の住処はどこなのか。

(一〇三) 106 樹木――なぜ気概の力がないのか，生長力は失くなっていないのに。

[16] (一〇四) 107 植物――あらゆる植物に，何らかの欲求がある。

(一〇五) 108 気概――気概は心臓のなかにはない。

(一〇六) 109 動物的魂――動物的魂は，それが肉体の完成であるからには，なぜ，理性的魂が肉体を離れるときに，なんの刻印も肉体に残らないようなことになろうか。

(一〇七) 110 動物的魂――動物的魂は，理性的魂が離れるときに肉体を離れるのか。

(一〇八) 111 太陽の光――どうして太陽の光は，太陽が没するとともに消えるのか。

(一〇九) 112 低次の魂――はたして低次の魂は高次の魂のもとに赴くのか，それとも衰滅するのか。

(一一〇) 113 物質的な色と形状――それらはいかにして生じ，いかにして衰滅するのか，はたして大気のなかで衰滅するのか，それとも衰滅しないのか。

(一一一) 114 魂――はたして二次的なものたちは魂のあとに来るのか，つまり動物的および自然的な魂は来るのか来ないのか。

(一一二) 115 星辰――星辰は諸感覚はもっているのに想起はもたない。(25)

(一一三) 116 呪術，呪文および魔法によって生じる諸事物。

---

(25) 「星辰は諸感覚はもっているのに想起はもたない (wa-an laysa la-hā dhikr wa-la-hā ḥasā'is)」――ルイスとともに異読 I. M にしたがう (GL[1], p. 18)。PA と DA，異読 B. O. P には「星辰は想起も諸感覚ももたない (...wa-*lā* la-hā ḥasā'is)」とある。

[(**一一三***) 呪術によって可視的になる諸事物。[26]]

(**一一四**) 117 世界に存する自然的，人工的な能動者と受動者[27]。

(**一一五**) 118 世界――世界は世界の諸部分に作用し，諸部分から作用を受ける，また世界の諸部分は互いに作用しあい，世界のなかにある自然的諸力によって，互いに作用を受けあう。

(**一一六**) 119 全体者の運動――この運動は全体者と諸部分に作用する。

(**一一七**) 120 諸部分――ある部分が他の部分に[28] 及ぼす作用から生じる諸事物は何であるか。

(**一一八**) 121 諸技芸とその営み――諸技芸において索められるものは何であるか。

[17] (**一一九**) 122 全体者の運動――この運動自体とその諸部分に作用するものは何であるか。

(**一二〇**) 123 太陽と月――両者が大地の諸事物に及ぼす作用は何であるか，またこの両者は，それら諸事物に，温熱および寒冷の作用とは異なる作用を及ぼす。

(**一二一**) 124 星辰――我々は，星辰から個別的な諸事物に降りかかってくる諸事象のどれ一つとして，星辰に発する意志に帰してはならない。

(**一二二**) 125 星辰――我々が，星辰から諸事物に降りかかってくる諸事象を，物体的な諸原因にも，魂的な諸原因にも，意志的な諸原因にも帰さなかったなら，星辰から生じるものは，いったいどのようにして生じるのか。

---

(26) 「呪術によって可視的になる諸事物（fī al-ashyā' al-kā'inah al-ru'yah min al-siḥr)」――この項目はPAの附加でDAとGL[1]にはない。この文はアラビア語としては無理があり，文字の並びが前項によく似ているので，誤写ではないかと思われる。

(27) 「世界に存する……（kā'inah fī al-'ālam)」――ルイスとともに，異読C, Pにより直前の等位接続詞waを取り除く（GL[1], p. 18)。なおPAは「世界に」が脱落している。

(28) 「他の部分に（fī al-ajzā')」――DAにしたがう。PAには「他の部分とともに（ma'a al-ajzā')」とある。

(**一二三**) 126 全体者――全体者は全生物を包含する，一なる生きたものである。

(**一二四**) 127 個別的な諸物体――それらは全体者に属する諸部分であり，全体者の魂から獲得する。

(**一二四***) 128 諸物体――諸物体には，全体者の魂がそのなかにあるものがあり，また全体者の魂とともに他の魂がそのなかにあるものがある。(29)

(**一二五**) 129 全体者の魂とは別の魂がそのなかにある諸物体――それらは内部および外部から諸刻印を受けとる。

(**一二六**) 130 全体者――全体者は個別的な苦痛を感じとる，己れに近いものも遠いものも。

(**一二七**) 131 個別的なもの――それらはいかにして互いに相手の苦痛をこうむるのか。

(**一二八**) 132 受動者に似た能動者――そういう能動者は，受動者に似ているかぎりは，受動者に似ていない能動者が苦痛をこうむるようにして苦痛をこうむることはない，また真の快美とは何か。

(**一二九**) 133 生きもの――生きものの諸活動は，いかにしてもろもろの形相のなかに入って幾重にもかさなるのか，生きものは一つであるのに。

(**一三〇**) 134 全体者――全体者のなかには気概に似た要素がある。

(**一三一**) 135 個別者――個別者は互いに益を与えあう。

(**一三二**) 136 生物――生物はいかにして互いに相手を食糧にしあうか。

(**一三三**) 137 全体者と個別者――なぜ個別者は互いに対立するようになるのか，[18] 全体者は対立せずに一致しているというのに，またなぜ個別者のあいだに対立があるのか。

(**一三四**) 138 個別者――個別者どうしは対立しているのに，いかにして全

---

(29) 「諸物体……（fī al-ajsām wa-an min-hā mā fī-hi nafs al-kull wa-min-hā mā fī-hi nafs ukhrā ma'a nafs al-kull）」――PA および DA の脱落を諸写本から補う（GL[1], p. 19）。

体者に一致するのか，これはちょうど舞踏の技芸のようなものである。

（**一三五**）139 天の諸事物――それらは能動者であり標識である。

（**一三六**）140 世界――世界こそは星辰を形づくるものであるとともに星辰の作用を受けるものである，それゆえ世界は己れ自身において確立してはいないものなのである。(30)

（**一三七**）141 全体者から我々のもとに届く諸事象。

（**一三八**）全体者から(31) 我々のもとに届かない諸事象。(32)

（**一三九**）142 星辰の形状――星辰にそなわる諸形状は力であるが，これらの力はそれら諸形状から形づくられたものである。

---

(30) 「己れ自身において確立してはいないものなのである（alladhī lā yathbutu fī dhāti-hi）」――PA および DA による。ルイスは異読 C によって「己れ自身から作用を受けている（yanfa'ilu min dhāti-hi）」と訳している（GL[1], p. 21）。

(31) 「全体者から（min-hu）」――ルイスの読みかえにしたがい，女性形代名詞（hā）を男性形の代名詞（hu）に改める（p. 21）。男性形代名詞のままでは「諸事象から」となる。

(32) 「全体者から……」――ルイスは異読 C, I, M, O, P によって等位接続詞 wa を補い，前項とこの項を一文ととらえている（GL[1], p. 21）。

『神学の書』／『エンネアデス』対照表(33)

Theologia Cephalaea / *Enneades* Ⅳ 4 [28]

1：1, 1	2：1, 11	3：1, 15	4：1, 18
5：1, 33	6：2, 1	7：2, 10	8：2, 22
9：2, 26	10：3, 3	11：3, 6	12：3, 9
13：4, 1	14：4, 6	15：4, 7	16：4, 11
17：4, 15	18：5, 1	19：5, 11	20：5, 13
21：6, 4	22：6, 7	23：6, 10	24：7, 4
25：8, 1	26：9, 1	27：10, 1	28：10, 4
29：10, 6	30：10, 11	31：11, 12	32：12, 5
33：12, 13	34：12, 39	35：12, 48	36：13, 1
37：13, 3	38：13, 13	39：13, 14	40：13, 16
41：13, 17	42：13, 19	43：14, 1	44：15, 2
45：15, 7	46：15, 11	47：15, 14	48：15, 16
49：16, 1	50：16, 5	51：16, 6	52：16, 15
53：16, 17	54：16, 17	55：16, 18	56：16, 21
57：16, 23	58：16, 24	59：16, 27	60：17, 1
61：17, 11	62：17, 16	63：17, 20	64：17, 27
65：18, 1	66：18, 6	67：18, 10	68：18, 19
69：18, 22	70：19, 1	71：19, 5	72：19, 12
73：19, 22	74：20, 1	75：20, 15	76：20, 20
77：20, 22	78：20, 25	79：20, 33	80：20, 34
81：21, 1	82：22, 1	83：22, 3	84：22, 5
85：22, 43	86：23, 1	87：23, 13	88：23, 15
89：23, 18	90：23, 32	91：23, 37	92：24, 3
93：24, 13	94：24, 19	95：24, 33	96：25, 1
97：26, 3	98：26, 5	99：26, 23	100：27, 1
101：27, 7	102：27, 13	103：28, 2	104：28, 15
105：28, 28	106：28, 58	107：28, 62	108：28, 72

(33) たとえば1：1, 1は，題目一覧の最初の項目が『エンネアデス』第四論集第四篇第一章の一行目に対応することを示す。

109：29, 2	**110**：29, 7	**111**：29, 9	**112**：29, 14
113：29, 20	**114**：29, 45	**115**：30, 1	**116**：30, 29
117：31, 1	**118**：31, 3	**119**：31, 9	**120**：31, 12
121：31, 16	**122**：31, 24	**123**：31, 35	**124**：31, 48
125：32, 1	**126**：32, 4	**127**：32, 7	**128**：32, 10
129：32, 11	**130**：32, 13	**131**：32, 19	**132**：32, 23
133：32, 25	**134**：32, 30	**135**：32, 35	**136**：32, 36
137：32, 44	**138**：33, 3	**139**：33, 26	**140**：33, 27
141：34, 1	**142**：34, 26		